

天高く、初秋を感じさせる美しい季節となりました。

お元気でいらっしゃいますか？

お祈りいただいた9月7日～13日のルーマニア賛美伝道旅行を、大きな祝福のうちに終えることができました。感謝いたします。

以下、今日はルーマニアの報告をさせていただきます。今回は、非常に長くなってしまったことをどうぞお許してください。皆さんにお分かちしたいことを最小限にまとめても、たいへんな量になってしまいました。

どうぞお時間のある時に、少しずつお読みいただき、ルーマニアのためにお祈りいただけますなら、ほんとうに感謝です。

私は、これから、10月15日から日本での奉仕のための集中準備に入ります。どうぞそのためにもお祈りください。

●9月8日～10日、アルベシティのクリスチャン教育センターでの青年会

トランシルバニア地方のクルージュから、川井宣教師ご夫妻、川瀬宣教師ご夫妻と共に、豪雨の中を車でルーマニアを南下、9時間後にやっとブラショフとブカレストの中間にある、山間の村、アルベシティの「クリスチャン教育センター」に到着しました。

このセンターは、ルーマニア福音教会派によって建てられました。ルーマニア福音教会派というのは、20世紀初頭にルーマニア正教会から福音派になった信者による250から成る教会の連合です。

♪ ルーマニア福音教会派について

1916年、ルーマニア正教会の司祭であったドミトリ・コリネレスクが、聖書をもっと分かり易くするために訳し始めました。その翻訳を通して、彼は自分が罪人であることが分かり、神の御前に罪を悔い改めたのです。コリネレスクはその後、4年がかりで聖書を翻訳しました。シンプルで誰にも分かり易く、かつ詩的なコリネレスク翻訳聖書は、今なおルーマニアの多くのクリスチャンたちに用いられています。

回心後のコリネレスクの説教は、多くの人々を悔い改めへと導きました。この頃、やはりルーマニア正教会の司祭であった、テオドール・ポペスクの奥さんが亡くなりました。しかしポペスクは、自分の妻が天国へ行ったかどうかについて平安が得られませんでした。そこで、コリネレスクのところへ話しにいったのです。そこで、コリネレスクの説教を聞いて大いに感動し、ポペスクも彼と同じような説教をするようになりました。ところが、コリネレスクが説教する時のようには誰も涙を流さないし、誰も救いに導かれませんでした。そこで、ポペスクはコリネレスクにこう尋ねました。「私はあなたと同じ説教をしているのに、人々の反応があなたと私では全然違うのはどうしてなのでしょう。」そこでコリネレスクは、ポペスクにこう答えたのでした。「あなた自身が、まず、神の御前に悔い改めなければなりません。」

以降、コリネレスクとポペスクが中心となって、真の悔い改めに至った正教徒たちから生まれたのが、ルーマニア福音教会派です。

♪ 青年会にて



(工藤の左隣がドリーナ)

した。信仰を持っている子もあれば、そうでない子もいます。けれども、この青年会を通して、いつも救いに導かれる子どもたちが起こされているそうです。

朝、夕の青年会での聖書の学びのときに、私たちは特別賛美をさせていただきます。川井宣教師も宣教師になる前は、ボストンのパークリー音楽大学で学ばれた音楽家であり、25歳の川瀬宣教師も、彼の奥さん、イダさん（ウクライナ人）も、共に素晴らしい音楽の賜物を神様からいただいている方たちです。私たちの主への賛美は大いに盛り上がりました。青年たちも数曲賛美しましたが、彼らの賛美の素晴らしさには感嘆しました。ここに参加していたのは、45人の青年たちで、14歳～21歳の、主にルーマニア福音教会派のクリスチャン・ファミリーの子どもたちで

中に、ドリーナという女子大生が参加していました。彼女は孤児です。でも大学で勉強したいと思い、学長に話しました。そのとき学長は、「あなたからはお金は取りませんから、ここで勉強なさい。」と言ってくれたそうです。そして、昨年初めてこの青年会に参加して、イエス・キリストを救い主として受け入れました。彼女は、大学卒業後は是非神様のために働きたいと願っています。どうぞ、皆様もドリーナのこれからの歩みのためにお祈りください。

●9月10日～11日、フネドアラ

10日朝、私たちはアルベシティの青年たちに別れを告げ、もと来た道をクルージュ方面に北上しました。夕方、やっと訪問目的地であったフネドアラという町に到着しました。共産主義時代に建てられたアパートのあちこちの窓からは黒い煙が出ており、壁はそのすすで真っ黒でした。聞けば、アパートの中で石炭や薪を燃やして暖を取っているということでした。外を通る人々を見ても、町全体の貧しさが伺えました。

♪ 孤児院「マラナタ」

私たちは、この町で牧師をしながら孤児院も経営しているハダ牧師を訪れました。「マラナタ」と名付けられた孤児院には、3歳～7歳までの28人の孤児たちが元気に暮らしていました。

ハダ牧師は、共産主義が崩壊した翌年の1990年、ここに孤児院を建てるように、明確なビジョンを主からいただいたそうです。そして、その資金づくりのためにアメリカへ渡航して、日雇いで建設業の仕事をしました。当時、外国人の一時間のアルバイト料は3ドルだったといえます。それでも、彼は、一日中働いて毎日30ドル～40ドル稼ぎ、6000ドルを持ってルーマニアに戻りました。そして、1991年に、共産党員の教育機関だった大きな建物を市に売って欲しいと交渉したところ、市は、なんと、その大きな2棟の建物を、土地付きで6500ドルという安値で譲り渡してくれました。それから少しずつ改装し、孤児たちをそこに住まわせるようになりました。質素ながら、実にきれいに整頓されていました。私たちが宿泊させていただいた部屋も、心を込めて整えてくださったことがよく分かりました。

ハダ牧師は、11人兄弟の中に育ち、家庭が貧しかったために、自分も孤児院に入っていた時期があったそうです。だから孤児を助ける働きをしたかった、と言います。2000年からは、奥さんのジョセフィーナが、孤児院の向かいに給食場を造りました。ここには、50人の貧しい家庭の子供たちが食事をしに来ています。ある子供は、毎日4Kmも歩いてここに来るそうです。

ハダ牧師に、「一番、大変なことは？」と聞くと、「その日その日の必要が満たされることが私たちの一番の課題です。子供たちが食べるために、一日1ユーロ必要です。給食の分も含めて、一日78ユーロ必要ですから、それをまかなってゆくのは大変なことです。」「物がすっかり尽きたことが何度もありました。でも、その度に主が私たちを顧みてくださいました。」「天の御父こそ、孤児たちの父です。天の父ご自身がこの子たちを養ってくださっているのです。」と答えた温厚で愛にあふれたハダ牧師に、イギリスのジョージ・ミュラーの姿が重なりました。

「マラナタ」の特徴は、子どもたちの家族とコンタクトを取りながら、一日も早く家族と一緒に暮らせるように働いていることです。そして神を中心とした家族になって欲しいと、その家族に教会に来てもらい、神の言葉に触れてもらっています。これまで、子どもはもちろん、多くの家族が主に立ち返ってゆきました。今、その家族は、貧しいながらも、嘆きの人生から、主に寄り頼み、主に感謝を捧げる人生へと変えられてきています。

私はマラナタの孤児たちのために、日本の皆さんからの献金をお捧げさせていただきました。ハダ牧師は涙を流しながら感謝されました。そして、「私たちとここの子どもたちは、あなたと、この献金を捧げてくださった方々のために、毎朝祈らせていただきます。」とおっしゃってくださいました。

♪ 貧民地区



11日の朝、ハダ牧師は、私たちを貧民地区に案内してくれました。彼は、毎朝、貧民地区の家庭の一軒一軒を、お菓子や衣類を携えて訪問しているのです。以前この町に、チャウセスクが石炭と鉄鋼の町にしようと、大きな工場を造りました。けれどもそれは大失敗に終わり、多くの失業者であふれるようになりました。以前は28000人の労働者だったのが、今は3000人しか働いておらず、解雇された人々は、故郷の農作業に戻った人もいますが、故郷がない人は、ここに留まって生きてゆくしか方法がありませんでした。

(フネドアラのクリスチャンホーム)

スペインで、物乞いをする貧しいジプシーたちのことはよく見てはいたものの、実際にその人たちの家まで行ったことはありませんでした。鼻をつく悪臭のたちこめた家、壁から隙間風が入るため、馬小屋のわらの中の方が暖かいので、そこで寝ているという人たち、貧しさのあまり、なげやりになってしまっ、荒れ放題になっている家と、さまざまでした。バラック小屋の立ち並ぶ一角には、たったひとつの井戸しかありませんでした。

ハダ牧師が姿を現すと、みるみるたくさんの人たちが集まってきました。ハダ牧師が、「今緊急に必要なものは何か」と聞くと、彼らは、口をそろえて、これから寒くなるので、靴と靴下、それに手袋も欲しい、と言っていました。見ると、裸足の子、自分サイズよりはるかに大きな靴をはいている子、とさまざまでした。

また、何人かの子供と大人たちは、バケツとリヤカーを持っていました。聞くと、鉄くずを集めて売りにゆくのだそうです。20Kg集めると1ユーロで売れるとのこと。でも、鉄くずを20kg集めるのは容易なことではないはずです。でもここではそれしか生き延びる方法がないのだと言っていました。

● 9月12日、教会賛美奉仕

ルーマニア最後の奉仕日、私たちはクルージュ近郊のバプテスト教会で奉仕させていただく予定でした。ところが私たちを車で連れて行ってくくださるバシレさんが朝寝坊をしてしまい、何と45分も遅れてやってきたのです。

時間までに目的地に到着できないことが明らかになった時点で、私たちは、途中、ゲルラという町にあるオープン・バイブル・チャーチの礼拝に参加させていただくことにしました。ところが、そのポップ牧師はドイツ語が堪能で、私たちを大歓迎してくださいました。そして、私はここで賛美と証し、川井宣教師はメッセージの奉仕をさせていただきました。聞けば、ポップ牧師は、この日を伝道礼拝にしたいと、無理やりに多くの人を招いたそうです。それが、自分でも期待した以上の伝道集会に主が導いてくださったと、喜んでくださいました。それまで、朝寝坊をしてしまって小さくなっていたバシレさんが、自分が朝寝坊したのは神様のご計画だったのだ、と急に元気になりました。

♪ 子どもの家「太陽の光」

ポップ牧師は、子どもの家「太陽の光」を経営しています。礼拝後、昼食にご自宅兼子どもの家「太陽の光」に招いてくださいました。

ポップ牧師も、ハダ牧師と同じように、共産主義が崩壊した1990年に、貧しい家庭の女の子たちに売春をして欲しくないと、女の子たちだけの子どもの家を建てるビジョンを抱きました。そしてその資金づくりに、1991年から1993年までドイツに出稼ぎにゆきました。彼が流暢にドイツ語を話すのはそのためでした。そして、「太陽の光」は、1996年に完成しました。今は15歳から18歳までの8人の女の子たちが住み、掃除、洗濯、料理、裁縫などを学んでいます。ここから学校に通っている子もいます。そして、この8人中6人が救いに導かれました。そのほとんどが、教会の青少年科のリーダーを務めているそうです。「この子たちが神と共に歩むこと。それが、この家を建てた第一目的でした。」とおっしゃるポップ牧師は、今、さらに多くの女の子たちを収容するべく、「太陽の光」を増築しています。「今年は資金が底をついてしまったので、建築作業をストップせざるを得なかった」、と言いながらも、「前の建物だって、5年かけて建てた。だから増築分も、主の時に完成させてくださると信じている。」と大きな笑顔で語ってくれました。

私は、今、日本人の皆様にも是非この現状を知っていただきたいと切望しながらこのメルマガを書きましたが、文章ではお伝えしきれないもどかしさも感じています。でも、この報告をお読みくださり、この国とこの国の人々のためにどうぞ祈ってください。そして、援助の手を差し伸べて下さる方は、是非、工藤篤子音楽ミニストーリーまでご一報ください。次回のルーマニア訪問の際か、「ミッション・宣教の声」、または川井宣教師を通して捧げさせていただきます。

主の祝福が、皆様と共にありますように！

工藤篤子

♪ ♪ ♪ ♪ ♪

【事務局からのお知らせ】

1. 10月26日（火）： 関西支援者の集い&チャリティーコンサート

・ 目的：イスラエルのベツレヘムにある心身障害者の施設「希望の家」支援（アラブ人クリスチャンが経営する施設）

・ 会費： 1,500円

・ 場所： IBC 時間：午後6時30分より。

2. 2005年3月19日(土)～28日(日) 「工藤篤子と行くイタリア旅行」を募集しています。

・旅行費用 : 348,000円

・最少催行人員 : 10人

お問い合わせは事務局まで。